

シルエットの変遷

酒井清子

Chang of the Silhouette

By

Kiyoko SAKAI

はじめに

時代の変遷に伴い、ファッションの進展は、めまぐるしく変化し、シルエットの変遷はまことに目覚しいものがあります。

ファッションは、平和で、自由な社会を基盤として、花開く性質のものでありますが、現代では、それがそのまま、シルエットに受け入れられない状態ではないでしょうか。そこで著者は、服装の歴史的な事のみでなく、流行傾向をも洞察し、その流れを把握し、被服構成の技術指導の役に立てばと思い、本研究を行なった。

方法および考察

I 方法

現在を含めて、ここ20数年間の、シルエットの変遷は、まことに目覚しいので、外国雑誌(VOGUE)を中心に、1950年～1959年間のシルエットの傾向を観察した。

II 考察

1950年～1959年代の、服飾に関係のあったものを表1に示す。

I ◎ 1952年：エバーグレイズ流行。

エバーグレイズ……アメリカのバンクラフト社のエンボス加工を併用した特殊な加工による、布地の登録商標名。

綿布に、合成樹脂を加え、熱処理により表面に凹凸模様を浮きだたせたもので、綿布を用いて、絹、毛の風あいを現わしたり、平織組織でありながら、ピケ、タフタ、綾、ジャガードなどの組織を現わしたり、独特な、しばが布面に現われる、しじら織りの風あいを持たせ、捺染をほどこしたりするのが特徴で、近年は綿布のみでなく、化学繊維のものにもされている。例えば、夏の婦人、子供用服地、家具カバー、カーテン、テーブル・クロスなど広範囲に使用されている、なお、エバーグレイズは、常に表面に、つやがあるという意味で、なめらかで光沢のある布地であるところから名付けられた名称。

◎ 1953年：チューリップ・ライン発表。

チューリップ・ライン……女性的な美しさを表現、チューリップの花の様なシルエットの意味、アーチ・ラインとも言われ、クリスチャン・ディオールが発表。

クリスチャン・ディオール：モード界の王様と言われた人で、独創的で世界の流行を完全に、リードし流行神様の名前をほしいままにした。彼自身の豊かな天分、芸術的な教養、感覚、革命的なアイデア、親しめる服など、具体性に富んだ人であつた。

コロネーション・カラー流行……イギリスのエリザベス女王の戴冠式があり、その式

表1 服飾史年表

年代	服飾内容	年代	服飾内容
1950	2月 アコーディオン・プリーツ 9月 三越 500万円ショウ	1955	2月 A・ライン発表 ベレー帽流行
1951	5月 NDC第2回ショウ・デザイン末端 誇張時代 6月 毎日ファッション・ガール結成 7月 田中千代, インターナショナル・フ ァッション・ショウ出品	8月 Yライン・発表 10月 マギー・ルフ・ショウ 落下傘スタイル・マンボスタイル	
1952	3月 T F M C 結成 エバーグレース流行	1956	2月 アロー・ライン発表 8月 マグネット・ライン発表
1953	2月 チューリップ・ライン発表 コロネーション・カラー流行 8月 伊東絹子, ミス・ユニバース第3位 入賞 T F M C 分裂, F M G 結成 ナイロン・ブラウス出現 9月 ショート・スカート発表 10月 日本流行色協会発足 11月 ディオール・ショウ, 来日 12月 すみれ・モデル・グループ発足 真知子巻き流行	1957	5月 鴨居羊子・下着ショウ, 下着ブーム 10月 ディオール死去 A D センター・ハンター・ライン発 表
1954	2月 S・ライン発表 4月 ヘップバーン刈り トリアドル・パンツ流行 8月 H・ライン発表 12月 NDC分裂・NDK結成	1958	2月 サツク・ドレス流行 4月 カルダン, 来日 三越・伊勢丹・イタリヤ・フアッ ション導入
		1959	1月 ミッチー・ブーム ササール・コート流行 3月 ルイ・フェロー来日 アंकロワイヤ・ブルー流行 6月 ブランビラ来日 デーパード・ルック開始 7月 児島明子, ミス・ユニバース第1位 入賞

に使われた色の事で、7色を言う。(女王式服の紫、貴族式服の赤、紋章色の青、黄、緑、なめし皮色、灰色)

伊東絹子が、ミス・ユニバース美人コンテストに第3位入賞。

日本では、初めての事なので、いろいろ騒がれた。八頭身美人の代表的な人であった。

NHK連続ドラマの題名「君の名は」の主人公、春樹と真知子がお茶の間の人気をさらった、その中で真知子が、用いたストール(衿巻)の巻き方が流行した。

◎ 1954年：S, Hライン発表。

S, Hライン……婦人服のシルエットの型の意味、Sラインはユベル・ドウ・ジバンシー。Hラインは、ディオールが発表。

ユベル・ドウ・ジバンシー：オートクチュール界の大御所、バレンシヤガと並らんで、他の会員とやや別の歩みをしながら、パリの服飾界に貢献したデザイナー。彼のデザインは常に、前衛的伝統を新しく表現し、新鮮味があり、しかも神秘的と言われ特に人気が高かった。

ヘップバーン刈り……アメリカ映画「ローマの休日」における、主演女優、オードリー・ヘップバーンの髪型、毛先を軽くストレート・バンクにし、サイドの毛は後にとかしつけ、衿足すれすれにカットした髪型。

◎ 1955年：A, Yライン発表。

A, Yライン……婦人服のシルエットの型の意味で、ディオールによって発表。

◎ 1956年：アロー・ライン、マグネット・ライン発表。

アロー・ライン……ディオールが発表したもので、女性らしいシルエットの意味。

マグネット・ライン……ディオールが発表した、U字型で、肩線、腰(W)に丸みを持ち、全体がゆるやかなカーブでほつそりとまとめたシルエット。

◎ 1957年：鴨居羊子の下着ショー発表。

下着は、白色とされていたのが、下着に色が使用され関心を集めた、虹の色の下着と言われ市販された。

1957年10月にディオールが死亡し、ファッション界は混乱をした。

◎ 1958年：サック・ドレス発表。

ディオールの死後、一番弟子であった、イブ・サンローランが発表したもので、着やすい服として世界中に流行した。

イブ・サンローラン：フランスのデザイナー、1954年、国際羊毛に出品した作品が1位となり、ディオールの店に入り、ディオールの、この上もない相談相手で、又協力者であった、ディオール死後、21才の若さであったが、彼に白羽の矢が立ち世界注目のうちにディオール2世となった。

◎ 1959年：皇太子妃決定。

ミッチー・ブーム。

児島明子がミス・ユニバース大会にて、第1位の栄冠。

ササール・コート……1958年、日本で封切られた、イタリア映画『三月生れ』主演女優ジャクリーヌ・ササールが映画の中で着たコートの事で、比較的オーソドックスな型の、ダスター・コートの事で製品メーカーが宣伝のために、ササール・コートとして売り出したもので、従来のダスター・コートに、あきっていた当時の人達に喜ばれ流行した。

アンクロワイヤブル……信じられない、奇妙なの意味で、明日に何事が起こるかわからないと言う不安な感じを、表現した髪型、1958年の秋冬にフランスの髪デザイナーが考案した、ヘアスタイルで当時の世情を現わしたものである。

◎ デーパード・ルック……デーパードとは、先が次第に細くなった、次第に減じたの意味で服飾用語としては、裾つぼまりの意味、例えば、裾つぼまりのスラックス、裾つぼまりのジャケットなどに使う。

2. スカート丈のきめ方。

図1はスカート丈の裾線をきめるのに必要な丈を現わしてみた。

マイクロ (Micro) 丈：極端に短い、これ以上短くしては、スカートとしての型を保てないと言うほど極度に丈を短くした、スカートの事で、1967年頃のミニ・スカートよりも短いと言う意味を強調するために作られた言葉で、特に、ひざ上何cmのものとは定められていない。

ミニ (Minimum) 丈：最少限度、極小の略語で、極端に小さいものに対して、ミニ・スカート、ミニ・コート、ミニ・スリッパなどに用いる。

ノルマル (Normal) 丈：普通、ひざがしらが見えかくれる丈でひざ中央の意味。

ミモレ (Mimole) 丈：中位、ひざ下からふくらはぎまでの意味。

ミディー (Medium) 丈：中位、ふくらはぎ中ほどの丈、非常に小さい、ミニ・スカ

ートに対して、1967年頃から現われたもので、ミニとマキシの中間と言う意味。

マキシ (Maximum) 丈：最大、足のくるぶしまでの丈、足の甲にかかるまでの丈の意味。

図1でもわかる様に、スカート丈は流行の流れの中で変化し表現されている。

3. 1950年～1959年間に発表された、コレクション春、秋の中から、外国雑誌を中心にデザインに現われたシルエットを、スタイル画に表現した。

◎ 1950年～1954年の5年間のシルエットは図2に示す。

1950年：1949年からの影響を受けて、女性的なシルエットが多くみられた、ディオールは、この年の春～夏の期間にパーティカル・ラインを発表。

パーティカル・ライン……ミ直角の〃ミ垂直の〃意味で直立線、垂直線の事を言う、これはスカートの型にそのシルエットが見られた。袖の扱い、打合の扱いにその変化があり、アシンメトリー（斜め扱い）を強調している。

1951年：前年同様、女性的なシルエットが続き、肩線、袖に丸みを持ち、袖に変化があり、袖口はカフス付きが多く、衿の型は、ウイング・カラーが一般的に多い、全体的にクラシック調であった。

1952年：腰にポイントを、置いたシルエットで上衣丈は短く、なおこの年に、スリム・ルックを発表したが特徴は余り見られなかつた。

1953年：ディオールは、チューリップ・ラインを発表。

チューリップ・ライン……アーチ・ラインとも呼ばれ、女性的な、なだらかな線を持ったもので、丸み成形づけ、胸(B)、腰を強調した。丸みを持たせた袖に、ふくらみをつけ上衣丈は短く、スカートは細みにしてちょうどチューリップの花の様なシルエットであるためこれをチューリップ・ラインと名付けた。秋には、エッフェル塔・ラインを発表。このラインは、チューリップ・ラインの変化したもので、ハイウエストのドレスが流行した。

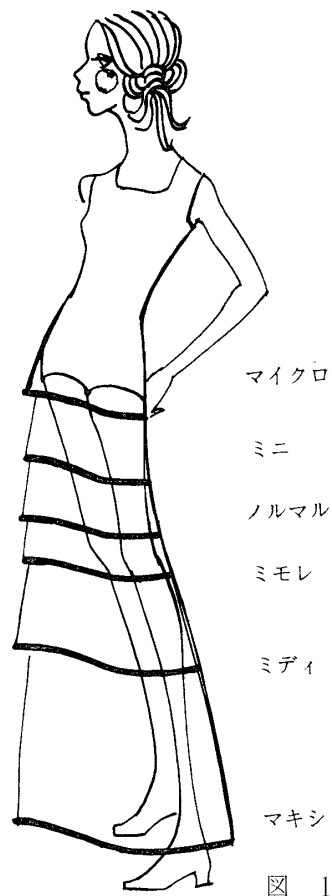


図 1

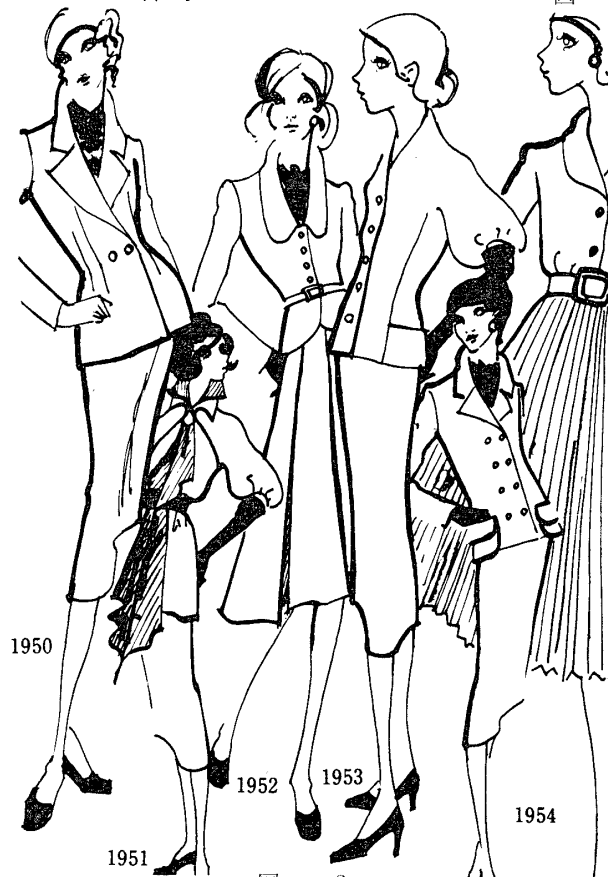


図 2

1954年：ディオールは、Hラインを発表。

Hライン……胸、腰、尻(H)が余り誇張のない、ずん胴シルエット、単純で、ストレートで長いジャケットの意味で、別名フラット・ルックとも言った、又ミューゲ・ラインと言いつこのラインは、すずらんの花の様なかれんなムードのあるシルエット。それは、衿もとに、リボン、ポーなど、プリーツ・スカートが注目された。

Sラインは、Hラインに圧倒されたのか、余り取り上げられなかった。

Sライン……サイド・シルエットに重点を置き、胸、尻にその特徴が見られたシルエット。またトリアドル・パンツが流行した。

トリアドル・パンツ……パンツの一種で、足で密着したひざより少し長いもので、1953年にマンボ・リズムの流行と共に一般化した。スペインの闘牛士が着用しているズボンに似ている。

◎ 1955年～1957年の3年間のシルエットを図3に示す。

1955年：ディオールはA・Yラインを発表。

Aライン……肩巾を狭く、胸を小さく裾広がりのシルエット。

Yライン……秋に発表したもので、袖付の変化で、胸のあたりを高く、ボディーを、スリムにしたシルエット。

両ラインとも、A・Yの字を感じさせるシルエットの意味。又ローウエストの流行、バレンシヤガはチュニック・スーツを発表している。

チュニック・スーツ……腰丈までの長い上着とスカートの組合せ、ロング・ジャケット・スーツとも言う。

バレンシヤガ：スペイン生まれのデザイナー。画家から服飾界に転向した人で、彼は、神経質で人前に顔を見せる事を好まず、少し変りものであったが、宣伝もせず、個性的な創作力を持ったデザイナーであった。

日本では、マンボ・スタイルが一部取り上げられた。

マンボ・スタイル……マンボとは、スペイン語で、ルンバの意味、キューバのリズム曲の事で、マンボ音楽のバンドマンの服装から取つたもので、柔らかい、細いスタイルの意味。細いズボンの事をマンボ・スタイルと言つたのではないかと推察される。

◎ 1956年：ディオールは、アロー・ライン、マグネット・ラインを発表。

アロー・ライン……ディオールが発表したドレスのシルエットで、アロー（矢羽）を思わせる真っすぐなシルエットが特徴、別名をfラインと言う。女らしいシルエットを現わす、



マグネット・ライン……秋に、腰を細く、スカートの型を馬蹄形（磁石）の様に大きくふくらませたシルエット。このラインの影響で、ケープが流行した。

1957年：ディオールは、フリー・ライン、スピンドル・ラインを発表。

フリー・ライン……自由な線の意味で、ディオールが1957年春に、リーニュ・リベルテとして発表した一連の作品を言う。線や、型にとらわれず、なだらかに体に合わせたシルエット。

スピンドル・ライン……1957年～1958年秋冬の、コレクションでディオールによって発表された。このラインは、紡錘の様に、中央部にふくらみがあり、上下でつぼまったシルエット。

ドレープの扱いが多く用いられた。

ディオールは、この年の秋10月に死亡したので、ファッションの流れは終わったかと思われたが、ディオールの一番弟子であった、イブ・サン・ローランによって受け継がれた。

◎ 1958年～1959年の2年間のシルエットを図4に示す。

1958年：サン・ローランは、トラペーズ・ライン、カーブド・ラインを発表。

トラペーズ・ライン……台形のシルエット、つまりドレスなどが、裾がやや広がったものでAラインに似ている。

腰に関係なく着やすい服女性らしい線、体の欠点、体の線をかくす（すべてをかくす）袋の様なシルエットとして、サック・ドレス（シミーズ・ドレス）が世界中に流行した。

サック・ドレス……ウエスト・ラインの切替線のない、ずん胴型の服、袋のような感じであるところから「袋型の服」の意味。1958年のパリ・コレクションで発表され話題となり世界的に流行をした。これは、1954年～1955年頃から、ウエストをぴったりさせない、ルーズ・フィットのドレスを、ディオールが、発表した以後、コレクションごとに、次第に、ルーズな

ものとなり1958年には、まったくウエストを、マークしない、袋の様なドレスとなったもので、ルーズ・フィットのドレスの一つの結論と言える。

又、セミ・タイト・スカートの始まりと言われた年代。

セミ・タイト・スカート……まっすぐなシルエットをもつタイト・スカートの裾がやや開いた型のスカート、タイト・スカートはひだを取って、運動量を取るがこれは、ひだを取



図 4

らなくても、歩行に十分な裾幅があるので活動しやすいスカートと言える。略して、セミ・タイトとも言ふ。

カーブド・ライン…… 1958年秋冬の、パリ、コレクションにて、サン・ローランが発表。アーチ型を基礎としたシルエット、体型を美しく見せるため、デザインの切替線によって、シルエットにカーブの美しさを取り入れたもののことを言う。秋には、一名、きのこ・ラインを発表、ピエール・カルダンは、ピンタックの手法により、きのこ・ラインを現わしている。

ピエール・カルダン：イタリア生まれのフランスのデザイナー。

ディオールのまな弟子で、特にギ・ラロッシュ、サン・ローランと並んで3人組と言われた1人であった。ディオールのデザインの忠実な仕事をしていて、1947年のニュー・ルック発表の時、裁断師として腕をふるった。

肩に丸みを持ち帝政時代のシルエットをしのばせるハイウエストに胸の位置に特徴を持ったエンパイヤ・ラインも発表した。ピンタック、ドレープの手法も表現された。

1959年：腰を自然にもどし、ベルトの扱いに、新しさを表現する試みが現われシルエットも変化した。

プリーツ・スカートも多く現われた、秋には再びほっそりとしたシルエットが登場し、シャネル・スーツが流行した。

シャネル・スーツ……フランスのパリのオートクチュールの女性デザイナー、ガブリエル・シャネルによって、考案されたスーツで、創作者の名を取ってシャネル・スーツと呼ばれる。

一般に衿なし、丈は比較的短かく、ルーズなシルエットのカーディガン風のジャケットとスカートの組合せで、袖口、打合、衿に、ブレードやリボンでふちどりをしたものが多い、デザインが、単純なために、カットにこだわるのではなく、材質の扱い方によって、イメージを表現した。

この年代から、シルエットは、*「自然にかえれ」*とラインは動いて行った。

結 論

1950年～1959年の10年間に絞り、シルエットの変遷を見ると、歴史は繰返すというが、ちよつとした、デザイン線のカットにより、古くも、新しくも変化する。

流行の流れの中で、シルエットの傾向を把握し、デザインを創作するエネルギー源を、求めるのに役立てばと思う。

ファツションの流行によって、シルエットは大衆に受け入れられる。

流行により、更に一般大衆は、よりファツションの変化を求める。

1950年～1959年代は、スカート丈は現代に比べて、少し長かったのではないかと、推察される。

肩、袖、胸、腰にデザインの特徴が見られた。肩、袖に丸みのあるデザインが多い。

スカートは細みか、プリーツ・スカートが多かった。

どのデザイナー達も、女性らしい、ラインを求めている。

ドレープ、プリーツの手法が見られた（柔かさを表現）。

10年の間には、特に多くのラインが発表された。シルエットは、多様な展開を見た年代である。

被服構成技術指導者として、余り流行に走る事なく、美的、衛生、機能面をも考え合わせて、個人の体型、個性をも把握し、時、場所にあった、すなわち T.P.O. の服装を指導することが、必要であると思う。

終わりに、本研究に御協力下さった、巖佐博子、谷美津子、辻文代さんに厚く感謝する。

参 考 文 献

田中千代，1969，服飾事典，同文書院。

千村典生，1969，図解ファッションの歴史，鎌倉書房。

1950～1959，VOGUE.